

問1 どの政党のどの政策をくりに抜き取られている。

問2 (ウ)

問3 対立を避け、政治的に中立であろうとする態度それ自体が、政治的中立という巧みな謳い文句のもとで展開される政治的な党派間の権力闘争に巻き込まれ、一方に利用されるなど否応なしに政治的な意味を持つてしまうから。

問4 対立し合う多様な価値のいずれにも関与しないような中立はありえない以上、事実と価値とを峻別しながら、政治的な党派性をも排除することなく、それらの対立する価値を突き合わせて検討するなかで、自分に対して自分の価値を自覚化しようとする習慣的な実践を通してはじめて良心の自由や寛容の観念が成立するという考え。

問5 自らの価値観が近い他者とも異なることを認めながら、多様な意見と公平に向き合いつつ議論に参加し、態度決定する実践を重ねなければ、討論する政治文化も育たず、政治に翻弄され排他的で抑圧的な社会に加担することになりかねないから。

問6 移民の受け入れをめぐって、国内の同質的な秩序を優先して受け入れに反対する政治的立場と、人権と多様性を重んじて受け入れにある程度寛容な政治的立場が存在するように、対立する価値を軸にして友と敵に分かれたそれぞれの集団に共有されている政治的な傾向のこと。

問1 ① 何とも言いようがないほど美しく整えて

② 入念に言いなされたところ

問2 X 完了の助動詞「り」の已然形

Y 完了の助動詞「ぬ」の命令形

問3 頼義は、九郎の着ている鎧が、手放すようにと指示した先日の鎧のままであると指摘し、九郎は、頼義の言葉に従って先日の鎧ではない別の鎧を着ていると答えた。

問4 若い者が、九郎のような贅沢で美しい出で立ちをすばらしいと思い、うらやんでまねをすると、家計が逼迫して従者を養えずに戦場で敵に簡単に滅ぼされてしまい、その結果、国が衰退しかねないので、見栄えのしない出で立ちこそがすばらしいと考えた。

問5 ア 見た目の派手さではなく、材質や性質がよく、実利を伴うものを選ぶという点。

イ 武器や馬を派手で目立つようにすると、戦場でまず敵に目をつけられて狙われ、思いも寄らず命を失うことになりかねないから。

三

問1 ① 私の涙も払うような方法がなくてせつなかつたことだなあ。

② 我が物顔にふるまうのである。

③ 気味悪く恐ろしいとお思いになる。

問2 昨夜は、雨の中長い道のをやってきたのに、あなたが帰したので、私は帰ったが、今夜は帰すことなく私に逢ってほしいということ。

問3 阿闍梨は、上皇の病気の祈禱のために要請されて比叡山から下りてきていたが、姫君の屋敷によくないものの気配がするのを見つけたために、通り過ぎることができなくなったから。

問4 阿闍梨が、几帳の端にあつた男君からの手紙を取ると、それが実は大きな蓮の葉であつたため、やって来た男君が本当は人間ではない化け物だとわかつて、恐怖のためにぞつとしたから。

問5 姫君が、男君のふりをした化け物に取り憑かれて、下手をすると魂を取られてしまう事態。

四

問1 家の者があわて、うろたえて、絹織物の商人の某を大型の箱に入れてかついで野外に持ち出し、戻って再び貨物を運んだので、大型の箱を見張る者がいなかった。

問2 だろぼうが、大型の箱を開こうとしたけれども、鍵がかかっていたので、斧で蓋を壊すと、箱の中に人がいたから、驚いて走って逃げ去った。

問3 繪賈の某は箱の蓋を壊す音に驚き目覚めると、炎と煙に包まれ人々の泣き叫ぶ大声が聞こえたので、死んで地獄に来たと思ったから。(60)

問4 傍に老叟の亦(た)火を避くる者有り。

問5 因りて語るに夜来(の)大焼(の)事を以てす。  
大いに焼くる事

問6 絹織物の商人の某が、老人から火事のことを聞き夜が明けてあたりを注意してよく見ると、たどりついたのが千本閻魔堂であったとわかった。実は家族が病気の自分を避難させるため大型の箱に入れて野外にかつぎ出したのであり、火事の中地獄の役人に見えていたのがだろぼうに過ぎなかったと始めて知った。

問7 a すでに b また c すなはち d ますます